

第8回超領域社会工学研究部会報告

第8回目の研究部会を2018年6月2日(土)3日(日)の両日にわたり伊東温泉「音無の森 緑風園」で開催しました。泊りがけの研究会ということで皆さん、何時にもまして、くつろいだ雰囲気での研究発表となりました。(参加者8名)研究発表は次の通りです。

近藤大博「文章作法 基礎の基礎」

今回も近藤会長にご講義いただきました。日頃、文章を書くことに馴れていない私たちにとって有益なご教示を頂きました。文章を書くにあたっては、

- 主語と述語を常に意識する。司馬遼太郎氏は書かれるときのみならず話される時も常に意識していたとの事です。
- 身近な人に呼んでもらう。池波正太郎氏は中学生程度の学力を前提に執筆されたそうです。
- 文章は3日寝かせる。等を念頭において書くべきとの事。

次の日のカレーライスや熟成した牛肉が美味しくなるのと同じで寝かせることは大事なようです。でもあまり寝かせすぎて賞味期限が切れてしまつては元も子ありません。やはり3日が限度の様です。

長井壽満「日本の結婚、家族の歴史を復習しよう」

橋本俊詔『男性という孤独な存在』(PHP新書)を援用しながら、奈良時代から現代に至る家族制度についての説明がありました。江戸時代では一夫一妻制度が原則ではありましたが現実の男女関係は厳格ではなかったようです。性関係では江戸時代と現代には共通性が見られるとの事。また、現代では「男」の存在がどんどん軽くなっているようで居場所もなくなり最後には捨てられるようです。そのうち生ゴミの集積場におじさんたちが袋に入れられて置かれてるかもしれません。男性一同妙に納得した発表でした。

加藤鳳 ストップモーションアニメーション作品発表

「R.I.L」 & 「Predacious Love」

今年5月に Edinboro University of Pennsylvania を卒業した発表者の3～4年生時代に制作したストップモーションアニメーション作品の実写を行いました。

○RIL (Rest in Love) 毎晩外を徘徊する不審な影。ある夜の日、その後を追いかけてみるとなんと彼はゾンビだった。彼に恋した彼女もまたゾンビになり、彼と永遠の愛を墓に誓う。

○Predacious Love (捕食者的愛情) 来る日も来る日もハイエナの餌食にならないように逃げる生活を送るガゼルの女の子ガゼッタ。ある日 1 匹の雄ライオンに出会う。彼に恋したガゼッタは、いつしか彼に食べられることを望み、その喜びを知る。

両作品ともホラー感満載でその観点が面白い作品です。発表者の濃密な人生経験がこうした作品を生んだ背景にあるのかもしれませんが。



RIL (© Asuka Kato)



Predacious Love (© Asuka Kato)

安田裕子「浦河べてるの当事者研究から当事者研究について考察する」

浦河べてるとは北海道浦河で精神に障害を持つ方が地域社会での生活を支援することを目的として設立されたコミュニティです。べてるでは長い間タブーとされていた統合失調症を持つ方々がご自身の幻覚や妄想を発表することで本人が持っている潜在的な希望を引き出す効果があるとしています。

さらに当事者が研究者になることは、自分の生活体験や出来事を研究対象として探求することが可能となり自分らしい発想で新たな理解を見出すプロセスにつなげる可能性があることが見出されました。確かにその人自身の経験や思いはある程度他人に伝えることはできても全てを伝えることは不可能です。客観性に欠けるきらいはありますが、研究そのものは今後の展開が楽しみです。

宮園圭太郎「薩摩の郷土菓子と伝承」

鹿児島ご出身の発表者ならではのテーマで、まず薩摩の郷土菓子を概観し、鹿児島名物「ボンタンアメ」の姉妹品「兵六餅」(ボンタンアメは柑橘系なのに対し兵六餅は草餅風味)のパッケージにおける図像学的観点からの考察がなされました。発表と同時に鹿児島より取り寄せた「兵六餅」や「かるかん」など実物をご提供され興味深い発表を聞きながらその味を楽しむことが出来ました。

まとめとして、数ある薩摩の銘菓の中で人名を付された「兵六餅」は大石兵六夢物語の魅力や風刺、教育的役割が織り込まれ近世の感性や風俗を現代に伝え続ける文学的役割を担っていることが理解されたとともに“実物を味わって理解を深める”という新しい発表スタイルの利点を学ぶことができました。

加藤香須美「語られる日本」

最近アメリカ、カナダにご旅行された発表者がアメリカニューヨーク州バッファローにある **Buffalo Naval & Military Park** を見学され、戦争に関する展示からアメリカが日本をどのように語っているかについての発表でした。歴史的な原因と結果という事実をアメリカでは年代を追って淡々と伝えているのに対して、日本ではその歴史的経緯を正しく伝えることなく原爆投下に対する被害者意識が前面に出され、単純に「戦争は悪い」「だまされた」等の感情論に終始する傾向にあることを改めて感じました。

草野純子「地震の予兆について ー撮影された雲と地震の規模、回数等の検証ー」

日本と地震は切り離せません。地震予知のため多額の費用が使われましたが良い結果は出ませんでした。地震発生時には動物が騒ぐ、地鳴り等予兆現象が見られます。今回はその中で地震雲を取り上げました。地震雲発生の仕組みや種類の説明がありました。今のところ科学的に関連付けられる地震雲はまだありませんが、こうした現象を生活の中で意識することが防災対策の一助になるのではないのでしょうか。

最後に発表者から「時々、空を見上げてみませんか！」のご提案がありました。地震雲を発見するためならボーッと空を眺めていても「地震雲を探しています」と言えば“チョコちゃんに叱られる”ことはないでしょう。

増子保志「変化するラーメン像 ー拉麺から **Ramen** へー」

ラーメンの具からナルトとほうれん草が消え、醤油や味噌、塩が定番だった時代から豚骨、魚介、そしてつけ麺が加わりました。ラーメンほど呼び名が変化する料理も珍しく、南京そばに始まり、支那そば、中華そば、ラーメンと変化し、今どきのラーメン屋は、カタカナ表記ではなく麵屋、麵処と称し、海外においては **Ramen** として人気を博しています。

ジャパニーズ中華料理研究家として名高い発表者によると国民食といわれるラーメンは社会の変化に呼応して呼称や内容が変化しており、まさに「ラーメンは社会を写す鏡である」との考察がなされました。今後ラーメンがどのような変化を遂げるのか興味深いところです。

2日間に及ぶ研究発表会は文芸、社会学、社会福祉、芸術、図像学、超科学、食文化、など多岐にわたり、今まで以上に学際的な研究発表となりました。

懇親会は料亭「和食かつぱれ」で行いました。発想豊かな研究部会長の提案で、懇親会史上、初めての試みとして参加者を2つのグループに分け、それぞれ独立

採算で注文を行い互いに食べたものを競うという新しい懇親会スタイルを導入しました。

会員同士の融合の場である懇親会においても常に切磋琢磨して事に対処するという意識を向上させるとともに“幹事におまかせ飲み放題コース”で済ますような安直な姿勢を正し、懇親会といえども真摯な姿勢で臨む必要性を改めて認識しました。グループはたぬきさんチームとぞうさんチームに分かれ、各自それぞれが注文を行いました。注文した料理及び飲み物には注文した人物の個性や生活環境、経験値が如実に反映されることが結果として考察されました。

懇親会恒例の締め挨拶「皆さん最高ですか?」「最高です!」の掛け声をつい失念してしまうほど会は盛り上がり笑いの渦の中で終了しました。会計時に部会長がお店の女性に某イケメン俳優に間違えられるという素晴らしいアクシデントもあり発表会以上に充実した会を持つことができました。

次回は 10 月 27 日に東京都内で開催の予定です。

(研究部会長 増子保志)

